

資料

アーカイブスと教育の幸福な出会い

高野慎太郎

2024年7月27日、多摩を拠点に活動する市民団体「ネットワーク・市民アーカイブ」にて「戦争体験を今に伝える」との表題で、山澤綾乃、山澤遥乃、筆者がお話をする機会を頂いた。同会発行の『アーカイブ通信』(No.33)に寄稿した文章の全長版をここに掲載する。

2024年7月27日(土)、「戦争体験を今に伝える―川田文子さんのこと」を作って」との題で、山澤綾乃さん、遥乃さんとともに、緑蔭トークにてお話をさせて頂きました。川田文子さんは、第二次世界大戦の際に自由学園の生徒(1938～1944年在学)で、1994年12月3日に動員先の中島飛行機武蔵製作所にて空襲にあい、お亡くなりになりました。川田さんについて、自由学園在学生の山澤姉妹が調べ、漫画と散文にまとめたのが表題の冊子です。

当時高校三年生だった山澤姉妹が表題冊子の制作にあたったのが「総合的な探究の時間」という授業です。評価や成績を気にしないで、自分の考えたいもの、気になっていることにのめり込んで探求するために設定された時間です。自由学園では毎週土曜日、2時間目から4時間目までを探求の時間にあてています。

これまで日本で行われてきた探求教育は「スタンプラリー形式」がもっぱらでした。まず問いを立てて、言葉の意味を調べて、図書館で資料を探して、インタビューをして、アンケート調査をして、専門家に話を聞いて…といったスタンプラリーを進めていくと「研究成果」が発表できる算段です。

ただ、こうした探求教育は生涯に続く探求者を育てません。大学生の授業時間以外での学習時間はいまま低下し続けています。理由は、探求する意思を育まないところにあります。意思がなくても、やる気がなくても活動できるというのがスタンプラリーの特徴だからです(1)。

自由学園ではスタンプラリー的なものを一切排して、意思を育むことを大事にしています。本当に探求したいことをゆっくり、じっくり探すことから始まります。探求テーマが決まらず、時には日向ぼっこをする日もありながらも、半年ほど模索を続けたある日、文字通り運命としか言いようのない出逢いをもたらされ、山澤姉妹は表題の探求にのめり込んでいくこととなりました(2)。

このように、自由学園の探求教育は知に対して情意を重視したものです。そしてそれはとりわけ「アーカイブス」というものの本義に照らした場合に、極めて補完的な役割を演じ得る可能性を秘めたものであると私には思われます。

ギリシャ語で arkheion(役所)を語源とするアーカイブスという語は、第一に公文書の保存庫を意味しており、第二にはそれを解釈する精神作用が働く場を意味しています(ジャック・デリダ『アーカイブの病』)。コレクション(物品の非現役化)と対照的に、アーカイブスは再現役化(再解釈)されることに意味があるのです。

総合的な探求の時間を通じて山澤姉妹は学内に所蔵された日誌を掘り起こし、関西の大学に所蔵されている資料を自身の手で筆写し、川田さんが使用していた防災頭巾の模型を作り…といった活動を行いました。こうした活動を通じてアーカイブス(マテリアル)は再現役化されました。

アーカイブスが知の宝庫であるならば、それを探す旅へと向かう意思が育まれるのは教育の場なのかもしれません。いずれにしても、アーカイブスなしに山澤姉妹の探求は成立し得ず、同時に山澤姉妹の意思のないところでアーカイブスは意味を持ち得ませんでした。その意味で、表掲冊子の制作は教育とアーカイブスの幸福な出会いに他なりませんでした。

註

- (1)詳細は拙稿『探求』新しい自分を発見する学び(『婦人之友 2022年5月号』所収)をご覧ください。
- (2)詳しい経緯は、山澤姉妹や保護者の方へのインタビューも交えまとめた拙論「真正性を伴う平和教育の創発に関する考察―「総合的な探究の時間」における平和教育の創発過程を事例として」(『平和社会学研究第二巻』所収)をご覧ください。